

ためには、協会の体質強化が必要なことは自明の理でありますので、活力に溢れた若い会員が増えて来た現在、この点の見直しを行うよい機会かと考えています。

協会の会報を発行することも協会発足の当初からの懸案でありました。筆を執っては一騎当千の会員揃いですが、面倒な事務は苦手という方が大部分で、発刊が延び延びになっていました。このたび会員の杉山、近藤、鈴木三氏のお骨折りで会報が発行されることになり、懸案の一つを解決する緒口が見いだされようとしています。会報は会員

内部に止まらず、協会外の方がたのお目に止まる機会が多いと思われしますので、内容が興味深く資料としても格調の高いものであってほしいと願っています。

最後に、協会の事務は永らく会員の片桐敏夫氏の献身的なご尽力に負うて来ましたが、今春からは同じく鈴木幸雄氏にお骨折りを願っています。当協会の今日までの成長に力を尽された会員各位およびご好意を寄せられた関係方面の方がたに心からお礼を申し上げる次第です。

(航空ジャーナリスト協会会長、千葉大学教授)

創刊に よ せ て

木 村 秀 政

毎日わが家の玄関にドサリと投げこまれる郵便物の中から、航空関係のものを探すと、月に20冊には達するであろう。それなのに、今度航空ジャーナリスト協会から又1冊出るというから驚いた。しかし考えてみると、協会員の多くは、私も含めて、原稿を頼まれて書く立場にあり、頼まれれば、少し気の進まないものでも、書かないわけには行かない。たまには、自分で好き勝手なテーマを選んで思う存分書きちらしてみたい。そんな気分になることはないだろうか。

今度出る雑誌には、そういう種類の原稿、雑誌の編集者が気がつかないで頼んでこない原稿、そんなものがまじっていたら、ユニークで面白くなるのではあるまいか。「風°天ニュース」の発刊に当って、ふとそんなことを考えた。

(財)日本航空協会常任理事事務局長

江 頭 正 樹

このたび貴協会で定期的にニュースを発行されることとなった由、誠に時宜を得たご活動と存じ心から敬意を表します。

航空に関する情報資料は質的にも多岐に亘り、量的にも累増してゆくことは必定でありますから、可及的速やかに収集管理の実を上げる時機となっています。一般的に情報資料の質と量は、その文化的評価の水準を示すものであり、わが航空に関するそれは、至って不十分であると感じるのは私一人ではありますまい。貴会はこの現状に着目され、この両3年来同志同憂の士を糾合され、密接な連繋の下にこの困難な目的遂行の場の設定に努力され、着々と実績を積み上げておられることは

心強いことです。この協調関係を軸として、今後本格的に生起する障害を乗り越えて頂きたいと思えます。

ご存じの様に、航空界はエゴの強い社会で自己中心の主張が強い余り、ともすれば他を悪く云う弊風があります。結果として肝腎な協力精神を忘れ、競争一点張の言動のみが顕著に現われ、処々に禍根を残しているのが目立ちます。願わくば貴会の運営面において、この弊風にまどわされることなく、毅然とし協調の実を挙げ発展の基盤を作って頂きたいと思えます。

吾々が受け継いだ文化的遺産は、それぞれ風雪に耐え残るべくして残ったものと、特志家の非常な努力があったからこそ残されたものの二つによって成立っています。貴会のご活動はいわばこの双方を兼ねている重要な仕事であります。今後はそれ等ご活躍の片鱗をニュースにより知り得ることを楽しみにしている1人であり、永く相互依存と協力関係を大切にしていきたいと考えています。

(社)日本航空技術協会常務理事

中 西 正 義

わが国の航空史のもとなる、もろもろの“情報”は第二次大戦のものは、なかなか豊富ですが、それ以前のものとなると戦後の混乱期に散逸したため遥かに少ないのが実情です。それでも識者の手で整理、公刊されたものがかなりあって、歴史の空白を埋める貴重なデータとなっていることはご承知のとおりです。

私どもの日本航空技術協会(JAEA)でも去る昭和54年から、主として戦後の航空史の一部となるべき「日本における航空機整備の歴史」の編さんを進めています。付随して触れる戦前、戦中の部分については情報量の不足を痛感しており、